



海を通じた交流

中国、朝鮮半島との交流

青谷上寺地遺跡の弥生人が、船に乗って中国大陸・朝鮮半島を含む日本海沿岸各地と交流を行っていたことは、豊富な出土資料から窺い知ることができます。

中国大陸からもたらされたものとして、青銅鏡、貨泉、鉄器（ちゅうぞうてつぷ 鑄造鉄斧、そかんとうとうす 素環頭刀子）などの金属製品があります。これらのうち、青銅鏡は前漢鏡3点、後漢鏡2点の計5点が出土しています。いずれも破片ですが、5点もの漢の鏡が継続的にもたらされた弥生時代の集落は他に例がなく、さらに、5点中最も古い星雲文鏡（紀元前1世紀中頃）は、弥生時代遺跡出土のものとしては本州唯一の出土例です。

こうした海外からの交易品は、主に北部九州を経由して当遺跡にもたらされていたようですが、ヌクト 勒島式といわれる朝鮮半島南部で使われていた無文土器が当遺跡から出土しており、北部九州を介さない朝鮮半島との直接的な交易が行われた可能性も窺われます。

交易の中継拠点としての青谷上寺地遺跡

弥生時代中期段階には、玉素材である北陸産の碧玉が青谷上寺地遺跡を経由して管玉に加工され、北部九州へもたらされていることが分かっています。一方、同時期の北部九州では、早良平野や唐津平野の甕棺墓に、北陸産碧玉製管玉が多量に副葬されています。北部九州のリーダーたち（かつぼう 首長層）が渴望したこれら玉類が、鉄器や鉄素材の交換財となり得たことから考えれば、大量の鉄器や大陸系文物を入手し得た青谷上寺地遺跡は、北陸と北部九州を結ぶ鉄・玉交易の重要な中継拠点であったことが窺われます。

弥生時代後期（紀元1～2世紀頃）になると、北陸地方における碧玉製品の生産拠点である八日市地方遺跡（石川県小松市）の衰退と連動する形で、青谷上寺地遺跡の玉作りは終息を迎えるにも関わらず、西方からの後漢鏡・貨泉・鉄器類等外来系文物の流入は継続します。玉関連遺物に代わって青谷上寺地遺跡から北部九州へもたらされたのが、いわゆる「花卉高杯」に代表される木製精製容器であり、その意匠は北陸地方へも発信されています。精製木製容器は、首長層が独占して使用する「威信財」として機能、流通したとの指摘があり、いわば有力者層向けの「青谷上寺地ブランド」の発信地として、青谷上寺地遺跡は最盛期を迎えることとなります。



青銅鏡・貨泉・鉄器・勒島式土器



星雲文鏡（前漢鏡）



管玉とその未成品・加工具



杯部



脚部

花卉高杯